

主 題：信仰者と罪：壊れた関係を修復する2

聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章6－7節

テーマ：教会における兄弟姉妹の関係を高め、壊れた関係を修復するためには

私たちは先週から信仰者と罪に関して、もっと言えば壊れた関係を修復するための八つの要素について学び始めました。私たちは日々さまざまな困難や苦しみに直面するのですが、その中でも特に同じ主を愛する兄弟姉妹との間に争いや亀裂が生じるような時、みことばからどのように応答すべきなのかを考え始めました。今朝もその続きを見ていきたいと思いますので、Ⅱコリント7章をお開きください。きょうは6－7節を学んでいきたいと思います。

○歴史的背景：パウロの苦しみとコリントの教会との関係

その前に、非常に大切なこととなりますので、この手紙を記した時のパウロの置かれていた状況、何よりもパウロとコリントの教会との間に起きていた出来事について、もう一度思い返してみてください。この手紙を記したパウロは、その信仰ゆえ、キリストの福音のためにありとあらゆる迫害や困難を経験し、ひどく苦しんでいました。彼の身には数え切れないほどの危険が迫り、そのいのちまでもが何度も何度も脅かされていたのです。Ⅱコリント4：8－9に「8 私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれています、行きづまることはありません。9 迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」とあります。人間的に考えてみれば、希望や喜びを容易に失っても仕方のないほどの痛みを、パウロは味わっていました。まさに彼自身が口にしていたように、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願っていた彼は、この世から大きな迫害を受けていました。でも彼が経験していた苦しみの多くは、この世からのものだけではありませんでした。彼は教会の外に問題を抱えていただけでなく、教会の中において、もっと言えば自分の愛していたコリントの兄弟姉妹によっても傷つけられ、大きな悲しみを心に覚えていたのです。

コリントの教会は、自分たちのために犠牲を払って福音やみことばを熱心に教えてくれたパウロの働きを裏切るような行動をとっていました。彼らは教会に入り込んで来た、にせ教師たちを受け入れたばかりか、彼らの語る間違った福音や教えを信じるようになっていたのです。それだけでなく、彼らはそんな偽りの教師たちが流すパウロに関するうそや非難も、問題視するのではなくそのまま信じて受け入れていました。彼らはパウロのことを守ろうとはしませんでした。コリントの兄弟姉妹たちは教会が誕生する時、1年半という時間をともにして、自分たちに愛と熱心さをもって仕えてくれたパウロの姿を忘れて、後から突然入り込んで来たにせ教師たちと一緒に、彼のことをとがめていたのです。パウロにとってこの事実はどれほど辛いことだったでしょう。しかし、コリントの教会を心から愛していたパウロは、当然そのままの状態ではしませんでした。だからこそ、彼は彼らのもとを直接訪れて問題を正そうとしたのです。しかし、この訪問は残念ながら悲しい結果に終わりました。コリントの教会は、間違いを認めなかったばかりか、ある人物はパウロのことを教会全体の前で激しく非難し、侮辱までしたのです。そしてあろうことか、教会もそんな罪を犯した人物を正しくさばくのではなく、逆に罪を正そうとしたパウロを拒絶し、攻撃したのです。この訪問は余りにも、大きな悲しみと痛みをパウロの心にもたらしました。そこで受けた苦しみと痛みが余りにも大きかったがゆえに、彼は再び彼らのもとを訪れることさえ望めなくなっていました。非常に大きな失意の中に彼は置かれていたのです。

そんな状態になつてなお、パウロはコリントの教会を変わずに愛していました。だからこそ、どうかして彼らが間違った歩みから立ち返ることを祈り求めながら、その罪を厳しく責める手紙を書き記したのです。その時に抱えていた思いについて、Ⅱコリント2：4にも「4 私は大きな苦しみと心の嘆き

から、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」と記されていました。パウロの愛はどんな時も変わりませんでした。こうして彼は愛する兄弟姉妹を思って、涙ながらに手紙を記し、その手紙を自分の代わりにコリントに届けてくれるようにと、同労者であるテトスに託して彼を送り出したのです。送り出されたテトスは当初、教会に手紙を届けて、その手紙にコリントの教会の人々がどのように応答するのかを確認した後で、トロアスという場所でパウロと落ち合う予定になっていました。

さて、テトスを送り出したパウロはさまざまな思いをうちに抱えながら、待ち合わせの場所であったトロアスへと予定どおりやって来て、そこでテトスを待っていました。でも結局のところ、彼らがその地で再会することはかなわなかったのです。その場にテトスが現れませんでした。だからこそ、パウロの不安や心配はピークに達していました。その心には平安など一切ありませんでした。そしてそんな彼は、トロアスの地でずっと待っていることができずに、テトスとどこかで出会えないかという願いを抱きながらマケドニヤへと向かって行きます。トロアスからマケドニヤへと向かっていく道中の、彼の持っていた葛藤や動揺した思いというものは私たちにも容易に想像できます。どうしてテトスは待ち合わせの場所に現れなかったのだろう、コリントの教会で何か新たな大きな問題があったのだろうか、私のことを非難した人たちが、今度はテトスのことを非難してはるかしてはしないだろうか。またコリントの兄弟姉妹たちは、私の書いた厳しい手紙を読んで、今度こそ罪を認めて悔い改めてくれるのだろうか、それとも自分のこの厳しい手紙を読んで、やっぱりパウロは愛のない人物だと非難して、罪の中を歩み続けるのだろうか。こうしてコリントの兄弟姉妹との壊れた関係によって生じた大きな不安や恐れを抱えながら、彼はマケドニヤへとやって来るのです。そして、その地に到着してからのことが、今回私たちが学び始めたこの7：5－16に記されていました。5節は「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。」と始まっていました。トロアスにいた時、大きな悲しみと不安を抱えて心には一切の平安はありませんでしたが、マケドニヤにやって来たパウロも少しの安らぎも見出すことができず、何ら変わっていなかったのです。

話はそれで終わりではありませんでした。そんな傷ついて嘆き悲しんでいたパウロの様子が5－16節の間で一変します。それはずっと会いたかったテトスと、マケドニヤの地で合流することができて、彼からコリントの兄弟姉妹たちが罪を悔い改めたという知らせを聞いたからでした。あれほど頑なで過ちを認めなかった者たちが、罪を認めて心砕かれたことで、こじれた関係が改善へと向かっていくのです。そしてその結果、最後の16節に「私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいきます。」と、驚くべきことが記されていました。壊れていた関係は確実に変化していました。あれだけ自分を悲しませたコリントの兄弟姉妹たちに対して、パウロは最後には確固たる信頼を置くことができるようになっていたのです。パウロは一体どのようにして彼らに全幅の信頼を置くことができるようになったのでしょうか？コリントの教会との関係が修復されるに当たって、具体的にどのような要素があったのでしょうか？私たちはそのことを先週からともに考え始めたのです。

○壊れた関係を修復するための八つの要素：

背景の振り返りはここまでにして、内容に入っていきたいと思います。前回も言いましたけれども、私たち救われた後も罪を持っているひとりひとりにとって、聖書が人間関係についてどのようなことを言っているのかを正しく理解しているということは、非常に大切なこととなります。だから、もし今まさに兄弟姉妹との間で問題を抱えている人がおられるのであれば、もっと言えば、兄弟間でなくても、夫婦間でも親子間でもさまざまな人間関係において難しさを覚えている方がおられるのであれば、よくパウロのことばに耳を傾けてください。また感謝なことに、今はそのような壊れた関係はありませんよ

という方も、救われた私たちはみんな罪を持っている以上、この先、皆さんがだれかに対して罪を犯すことや、反対に皆さんがだれかに罪を犯されるということは必ずあります。そのような場面に直面した時、私たちに問われるのは、どのように聖書的に向き合うかということです。そして神様は私たちに、このみことばを通して、どのようにして向き合うべきなのかをはっきりと教えてくれていました。だから私たちは神様の栄光を現す者として、みことばを實踐する、みことばに従う者として、一体何が教えられているのかをよく考えて学んでいきましょう。

一度5-7節をお読みします

Ⅱコリント7：5-7

「:5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」

1. 慰めを与えてくださる神様 5-6節

さて、前回から私たちは壊れた関係を修復するための八つの要素を見始めました。きょうはその二つ目を見ていきたいと思うのですが、その前に一つ目であったことを思い返してみてください。一つ目として見たのは、慰めを与えてくださる神様でした。コリントの教会との関係で思い悩み、苦しんでいたパウロの弱った心に慰めを与えたのは、ほかのだれでもない神様でした。6節に「しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、……私たちを慰めてくださいました。」と書いていました。外側からの激しい迫害に加えて、コリントの教会との関係においても、ひどく心を悩ませていたパウロは、文字どおり肉体的にも精神的にも疲れ果てていました。しかし、そんな絶望的な状況にあったパウロは、神様のうちにこそどんな困難な状況であろうと、自分を励まして奮い立たせる力があると固く信じていたのです。そしてそのとおりに神様は働かれ、意気消沈し、どん底にいた彼を引き上げて、その心に大きな喜びと慰めを与えられたのです。

私たちもさまざまな問題や困難を抱えることがあります。しかし、そんな中でもいつも安心して身をゆだねることのできるお方がともにいることを、私たちは覚えていられるのです。だからこそ、問題に心を奪われるのではなくて、この慰めを与えてくださる偉大な神様に信頼して、その力に拠り頼むこと、この方が与えてくださる慰めの力に拠り頼むこと、それが壊れた関係を修復するために必要な一つ目の要素でした。

2. 準備されていた恵みの態度 6-7節

さて、続けてきょう私たちが二つ目に見る壊れた関係を修復するための要素が6-7節に挙げられていました。二つ目の要素は準備されていた恵みの態度です。

特にここで、心の底から再会を待ち望んでいたテトスと合流したパウロの様子、彼の態度に注目してください。「:6 しかし、氣落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」とありました。いま一度想像してみてください。テトスに再会するその時まで、パウロは深い悲しみや痛みを覚えていました。自分にのしかかるさまざまな不安や苦しみによって心は押しつぶされ、意気消沈し、希望を見出せずにいたのです。しかし、そんな氣落ちしていた彼に対して、慰め主である神様はあわれみを示し、働かれました。そして何より彼が望んでいたテトスとの再会をやっとのことで果たすことができたのです。パウロが遠くからテトスの姿を目にした時に、彼の心はどれほど安心したことでしょう。自分の方にやって来るテトスの姿

を見た時に、どれほど彼の心には大きな喜びが、慰めがあったでしょう。テトスと再会したことによって、彼のうちには大きな喜びが与えられていたのです。

しかし、パウロの心に喜びをもたらしたのは、テトスとの再会だけではありませんでした。テトスと再会したパウロは、彼からある知らせを聞かされるのです。それこそパウロがずっと祈り求めていたコリントの兄弟姉妹たちの悔い改めでした。7節に「ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」と記されていました。もちろん友人であり、愛する兄弟であるテトスと無事に再会できたことは、彼にとって何よりもすばらしい喜びであったのは間違いありません。しかし、それ以上に、あれだけ頑なでパウロのことばを受け入れようとしなかったコリントの教会が、厳しい手紙を読んで心砕かれ、悔い改めへと導かれたのです。

◎コリントの教会の悔い改め

ここで特に、パウロがテトスから報告を受けた彼らの悔い改めには三つの要素がありました。コリントの兄弟姉妹がパウロに対して「慕っていること」、「嘆き悲しんでいること」、そして「熱意を持っていてくれること」という三つことばが使われていました。それぞれどういう意味なのでしょう。

①慕っていること

一つ目に出てきていたこの「慕っていること」ということばには、もともと「熱望」とか「強い願い」という意味が含まれています。そしてこれと同じことばがⅠテサロニケ3：6では「また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。」と用いられるのです。ここで「しきりに……会いたがっていること」と訳されていることばが、この「慕っている」と同じになるのです。つまりコリントの兄弟姉妹たちがパウロのことを慕っていると口にしていたというのは、彼らがパウロと再び見えることを強く願っていたということです。思い返せば、確かに彼らはかつてパウロが訪問して来たことを喜ばず、彼の指摘を受け入れなかったばかりか、非難して追い返しました。その扱いが余にもひどいものだったので、大きな痛みを負ったパウロはもう二度と訪問などしたくないという思いまで抱いていたのです。しかし、そんなひどいふるまいをした彼らの心が変わられました。彼らは自分たちが深く傷つけたパウロに再び会うことを、そして何よりその関係が修復されることを強く願うようになっていたのです。コリントの兄弟姉妹たちはパウロにもう一度会いたい、再会したいという強い思いを持っていたということです。

②嘆き悲しんでいること

でも、砕かれた彼らの心のうちに生じた思いは、それだけではありませんでした。二つ目にあったのは「嘆き悲しんでいること」ということばでした。彼らはパウロに会うことを単に切望していただけではなくて、自分たちが以前パウロに対して罪を犯して苦痛を与えたこと、みずから関係を壊してしまったことを激しく後悔して、嘆き悲しむ、そんな思いが彼らのうちに生じていたということです。彼らは自分たちのために犠牲を払って、愛を示してくれていたパウロを見捨てて、にせ教師たちのことばを信じたことがいかに愚かであったかということに気づかされました。また、そんなパウロを教会全体の前で悪意を持って非難した者から守るのではなくて、一緒になって非難をし、その問題を正しく扱わなかったことを深く後悔していたのです。彼らはパウロに対して、何よりも神様に対して、愚かな罪を犯したと認め、そのことで涙を流して悔んでいました。コリントの兄弟姉妹たちは、パウロに会うことだけを願っていたのではなくて、パウロにしたことを悔やんでいたのです。

③熱意を持っていてくれること

そして最後三つ目にあったのは、「熱意を持っていてくれること」でした。コリントの兄弟姉妹たちは、自分たちが犯した罪を認めて、それを悲しんでいただけではなくて、その問題や過ちを正しく扱おうとすることに熱意を持っていたということです。彼らは単にしたことに対してごめんなさい、間違っていましたと、悲しい思いを抱いていただけではなくて、したことに対して間違っていたから、それを正すことに関する強い思いを持っていたということです。

その一つの例として見られるのが、パウロのことを公の場で非難した人物に対して、彼らがなした教会戒規でした。見てきたように、罪の中を歩んでいた時は、彼らは教会全体の前でパウロのことをはずかしめた者に対して何もしようともしませんでした。でも、そのことを悔い改めた彼らは、その人物に戒規を施して教会から追い出したのです。彼らはそれほどまでに自分たちの間違った行為を正すことに熱心に向き合っていました。その熱意が余りにも大きくて、戒規に遭っているその人が本当に悔い改めたのであれば、限度を超えて厳しくするのではなく、赦してあげなさいと、パウロが諭す必要があるほどでした。それだけ彼らは間違いを正すことに対して熱心になっていたのです。その様子がⅡコリント 2：6-7に記されていました。「:6 その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、（教会戒規のことです）:7 あなたがたは、むしろ、その人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。」と書いていました。

こうして彼らはパウロの厳しい手紙に対して、会いたいという切望と、したことを嘆き悲しむ思いと、そして正しいことをしようとする熱意をもって応答しました。彼らがどのようにして悔い改めたのかについては、まだこの後の箇所にも出てきます。その時に悔い改めというものが一体何なのか、悔い改めというものがどんな実を見出すのかを詳しく見たいと思います。でもこの時点で、彼らの心と態度は変わっていたと言えます。

そして、そのことをテスから報告として受けたパウロの心は慰められ、ますます大きな喜びに満ちあふれていました。すばらしいことが起こったのです。でもここで注目してほしいことが一つあります。それは、パウロがコリントの教会が悔い改めたという知らせを、信頼するテスから聞かされた瞬間に心から喜んでいたということです。パウロは実際にそのことを見たとは、まだここには書いていませんでした。パウロは熱意を持っていてくれることを見たので、私たちは喜びにあふれましたとは書いていなくて、「持っていることを知らされて」、彼は大きな喜びにあふれたのです。パウロはあれだけ心が傷つけられて、嘆き悲しんでいたにもかかわらず、コリントの兄弟姉妹が心砕かれた、真の悔い改めに至ったと聞いた瞬間に慰められて喜んでいました。

もし私たちがパウロの立場であれば、果たして私たちはどのようにふるまっていたでしょうか？ここまで見てきたように、コリントの教会の人々は、自分たちのためにすべてを犠牲にして、熱心に仕えてくれたパウロの働きを否定しました。にせ教師にだまされていた部分ももちろんあったにしろ、彼らはパウロの働きを非難して、彼の心に大きな傷を負わせたのです。あのパウロがもう二度と悲しませるような訪問はしませんと言うほど、彼の心は傷ついていました。またそれだけではなくて、教会の中でパウロのことを大胆にとがめて侮辱するような者たちに対して、教会が何もしなかったのです。むしろ変わらぬ愛をもって接していたパウロのことを、彼らはことごとく踏みにじっていたのです。パウロは彼らに対して苦い思いを抱いて、仕返するような思いを抱いていたとしても、彼らのことを容易に赦すことができなかつたとしても仕方がないというぐらい彼は傷ついていたのです。悔い改めをテスから耳にした時も、やっと彼らは自分たちの過ちを認めた、これまで私にしてきた不当な扱いやはずかしめに対して、正しく報いてもらおうじゃないとか、彼らには何度も何度も大きく傷つけられて悲しませられたのだから、彼らにも同じ悲しみを味わわせてやろうとか、そう考えてもおかしくないほどの痛みと悲しみをパウロは負っていました。

もっと言えば、私たちこそこんな弱さを覚えたりしませんか？だれかから何かの傷を負わせられたのであれば、その傷が大きければ大きいほど、相手にきつく仕返しすることを考えてしまうことがあります。きついことばや思いやりのないことばで傷つけられれば、そのまま自分もきついことばで応答しても構わないと考えて、ことばを発するかもしれません。不当な扱いやはずかしめを受けて、直接やり返すことができなければ、心のうちでその人に対して怒りや不満を抱いて、ゴシップや陰口という形で応戦しようとするかもしれません。またある時は自分の受けた苦しみや傷の深さを相手にも知らしめてやるために、あえて距離をとって冷たく接することもあるかもしれません。挙げれば切りはありませんけれども、だれかが自分を傷つけた時に、私たちは自分の手で、自分が受けたものをそのまま相手にも受けさせようと、何らかの形でやり返そうとすることがあります。行動に現さなかったとしても、心の中にそんな思いを抱くことはありませんか？でも、パウロはそうはしませんでした。彼はこれまで見てきたように、コリントの兄弟姉妹から何度も何度も大きな痛みを受けていたのです。意気消沈して涙を流して、心のうちに安らぎを見出すことができないほど思い悩むこともありました。しかし、それでもなお、彼は人々が罪を本当に悔い改め、自分との関係を修復したいと望んでいることを聞いた時に、そんな彼らを喜んで受け入れていたのです。パウロはテトスから話を耳にした時には、彼らを赦し、彼らを受け入れる心の準備が既になされていたということです。そしてこの準備されていた恵みの態度こそ、壊れた関係を修復するに当たって大切なものになります。

●恵みの態度を準備する：忘れてはならない二つの事実

私たちは時に多くのことに批判的になってしまって、まるで自分自身がさばき主かのようにふるまってしまうことがあります。どうすれば私たちは、パウロのように仕返しに走るのではなくて、そのことを受け入れて喜ぶことができるのでしょうか？どうすればそのような過ちに陥らないのでしょうか？私たちが、パウロが持っていた恵みの態度というものを準備する上で忘れてはいけない二つの事実があります。ですから残りの時間で、その二つの事実を聖書から考えてみましょう。

1) さばき主である神様

まず、私たちが恵みの態度を準備する上で忘れてはならない一つの事実は、さばき主である神様の存在です。神様がさばき主であるということです。言いかえると、これはもう当たり前のことかもしれませんが、私たち自身はだれひとりとしてほかの人をさばける立場にはない、私たちは神ではない、私たちはさばき主ではないということです。この「さばく」ということに関して、少し思い返してみてください。イエス様は、マタイ7：1-2で「:1 さばいてはいけません。さばかれたいからです。:2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」と述べられました。この「さばいてはいけません」ということばを聞くと、私たちはどんな問題であろうと決してさばいてはいけないのですと考えるかもしれません。ほかの人の考えや行動はいつも尊重されないといけないから、たとえそれらがどんなに間違っていたとしても、私たちは決して非難するべきではありませんと。確かに世の中を見たら、それは尊重しないといけません、間違っているとしてもそれを認めて、それをさばいてはいけませんと教えているかもしれませんけれども、果たして聖書は、イエス様はそんなことを教えているのでしょうか？

もちろんそうではありません。むしろ聖書は、私たちひとりひとりが正しいことと間違っていることをしっかりと吟味して判断することを繰り返し求めていました。Iテサロニケ5：21-22にも「:21 しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。:22 悪はどんな悪でも避けなさい。」とあります。正しいことと間違っているものを、悪はどんなものでも避けなさいと見分けることが言われていました。また、Iヨハネ4：1を見ても、「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」と書いてあります。「ためしなさい」とありました。コリントの教会の中に自分はクリ

スチャンと自称していながら、ことさらに不品行やそしりなどの罪を犯し続けるような者が存在していたのです。そんな人につき合ってははいけないと、厳しくパウロはさばいていました。「:11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。:12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。」と、Iコリント5:11-12に記されています。パウロは内部の人をさばくことは、あなたたちの責任ではないですかっていました。そして今、私たちが見ているこのIIコリントの内容を考えると、パウロはキリストの福音を離れて罪のうちを歩んでいたコリントの兄弟姉妹たちに対して、彼らを厳しく戒めて悔い改めることを求めていたのです。ですから、イエス様がさばいてはいけませんとそう口にされた時、これはすべての面において、たとえ間違いや罪さえも見逃してさばくことを全くしないという話をしていたのではなかったのです。むしろ私たちは良いものと間違っているものを、正しいものと過ちをしっかりと見分けることを言われていましたし、間違っているものに対して、戒めることや教えることもみことばの中で見て取ることができま

す。では、ここでイエス様がさばいてはいけないと言うのが、たとえ間違いや罪さえも見逃すということの意味していないのだとしたら、一体どんな意味で用いられていたのでしょうか？ここでイエス様が禁じていたさばきというのは、人が自分の基準に基づいて行う批判的で、偽善的なあわれみのないさばきのことです。これはまさにこの当時の律法学者やパリサイ人たちのさばきを特徴づけるものでした。律法学者やパリサイ人たちというのは、当時の社会において熱心な宗教家たちであって、自分たちこそが真理を知っていると思い込んでいました。彼らは自分たちこそが正しいと考えていたからこそ、周りの人々が自分たちの基準に達していなければ、容赦なく無慈悲にそのことを非難していたのです。マッカーサー先生もパリサイ人の間違ったさばきに関してこんなことばを残しています。「彼らは罪のために人々を批判していたわけではありません。その人の人格や性格、弱さや短所、その人の見た目や服装、その人が自分たちのように振る舞っていないことのために非難していたのです。また彼らは、人には見えない、理解できない、動機までもを裁いていたのです。」と。彼らは自分たちの正しさの基準に人々を当てはめようとし、それに当てはまらなければさばいていました。彼らはほかの人の心の状態など、だれにも見られるはずはないのに、まるで自分たちがさばき主かのようにふるまって、勝手に推測して判断を下していたのです。彼らの心には、人々を神様に向けることよりも、自分自身の正しさや義に人々が目を向けることへの願いがありました。このような自分たちの考えや基準に基づいて行われるパリサイ人たちの批判的で、偽善的なあわれみのないさばきを、イエス様は決してよしとはされなかったのです。

私たちもこのようなさばきを下すことはありませんか？私たちはほかの人が自分に対して何か過ちや罪を犯した時に、その人の動機を勝手に推測したり、自分の考えに勝手に当てはめて、相手を非難したりすることはないでしょうか？私たち自身がふさわしいと考える言動を、だれかがとっていないければ、自分が正しいと思う基準に達していなければ、相手を批判したりすることはないでしょうか？もし私たちが私たちの限られた知識の中で、自分の基準に基づいて、何が正しくて、何が間違っているのかを決め、人々に対してさばきを下しているのであれば、もし人々の目を神様に向けるのではなくて、自分の正しさを明らかにするために、だれかをさばいているのだとすれば、その人が何を言わんとしても、それは自分自身を神に見立てているということです。私たちはさばき主ではないのに、さばき主をしているということです。神様だけがさばき主なのに、私たちが「神様、ちょっとどいてください、私がこのことについて知っているから、私があなたの代わりにさばきます」と言っていることと同じだということです。

そして、もし自分をさばき主としてふるまっているのだとすれば、それには非常に大きな危険が伴うということ、イエス様はその後で続けて言われていました。マタイ7：1-2に「:1 さばいてはいけません。さばかれないためです。:2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」と書いていました。ここで言われていたことは非常に厳しく、非常に危険なことでした。イエス様は、あなた方がさばくとおりに、量っているそのとおりに、あなた方もさばかれ、あなた方も量られますよと。言いかえれば、神様は私たちがほかの人をさばいているその同じさばきの基準でもって私たちのことをもさばかれるということです。だとすれば、よく自分の歩みを振り返ってみましょう。果たして私たちは、いつも自分の基準を完全に満たしているのでしょうか？私たちがだれかに対してさばきを下す時に、自分の中に基準があるかもしれません。でも、その自分の基準というものを私たちはいつもどんな時も、完全に満たしているのでしょうか？答えはもちろんノーです。だれひとりとして自分のうちに持っている基準を完全に満たしている者などいないのです。そしてそんな私たちにイエス様が言うのです。もし私たちが自分のうちに持っているその基準で、だれかをさばこうとしているにもかかわらず、その基準をあなた自身が満たしていないのであれば、もし自分が満たしていないその基準でもってだれかを責めているのであれば、その基準をもって神様はあなたのことをさばかれると。だからこそ、私たちはほかの人に対して、自分の基準に基づいてさばきを行うべきではないのです。誤解がないように言っておきますけれども、罪を指摘するという話はまた別の話です。ここで言われていることは、自分自身の正しさの基準に基づいて、自分も果たしていないその基準に基づいて、その基準を振りかざしてさばき主としてふるまうのは、私たちの役割ではないということです。さばきを行うのは神様の働きです。どんな問題であろうとも、この方だけは必ず正しい完璧な基準ですべてのことをさばかれるのです。私たちにできることは、この方の手をどけて「私がやります」ではなくて、この完璧なさばき主がその働きをなすように、その方の御手にゆだねることです。

かつての信仰者たちはそのようにして歩んでいました。一つの例を挙げるとしたら、エジプトに奴隷として売られたヨセフが、彼の兄弟たちと再会した時の様子が、創世記に記されていました。そして、父であったヤコブが死んだ時に、ヨセフの兄弟たちがこんなことを思うのです。そのことが50：15に「ヨセフの兄弟たちが、彼らの父が死んだのを見たとき、彼らは、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない」と言った。」と書いてありました。兄弟たちは、自分たちはひどいことをしたから、ヨセフはまだそのことを恨んでいて仕返しをするかもしれないと心配したのです。そんな彼らに対してヨセフは50：19-20で「:19 ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。:20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」と書いていました。ヨセフは、そんなことは私の役割ではありませんと言ったのです。私は仕返しはしません、私が神の代わりでしょうかと。ヨセフは確かにひどいことをされました。しかし、そのことを赦したのです。神様の御手にゆだねていました。そしてここでも書いていましたけれども、人々が悪を働いたけれども、神様は良いことの計らいとなされたのです。

私たちが壊れた関係を修復することを考える時に、私たちがさばき主となって、だれかがしたことをいつもさばき続けるような状態だと、その関係がどうなるかは想像できるはずですが、ここで一つ言われていたことは、さばき主は神様だということでした。その方に私たちはゆだねることができるのです。

2) さばかれるべき私たち

そしてそれに関連して、恵みの態度を準備する上で忘れてはいけない二つ目の事実は、神様がさばき主であるだけではなくて、私たちはさばかれるべき存在であったということです。私たちは、さばき主では到底ありません。それだけではなくて、私たちはみんな神様の完璧な基準を前にすれば、すべての者がそれを到底満たすことのできない罪人だということです。だから私たちがさばく、さばかないとい

うことを考える前に、私たちが覚えなければいけないのは、私たちは本来であれば、みんな神様の御怒りを受けて、永遠の地獄で滅ぶべき存在だったということです。そして、そんな私たちが神様がただ恵みによって、キリストによって救ってくださったのです。私たちがそれに値したからではなく、私たちが神様の敵として歩んでいた時に、この方は愛を示してくださいました。ローマ5：8に「:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と書いてあるように、私たちがあなたのことなんて知りません、あなたに従って行きたくもありません、あなたなんて私の人生には、私の生活には要りませんと言って逆らって、敵対していたその時に、神様は私たちに愛を示してくださいました。これが私たちの姿だということを忘れてはいけないということです。さばき主としてのふるまいよりも、私たちが赦された者なのだ、本来であればさばかれるべき存在だったのだということを忘れてはいけません。

〇まとめ

だからだれかが私たちに罪を犯した時に、もちろん私たちにはそのことに対してやり返そうとする誘惑がやって来ることもあります。相手が繰り返し自分を傷つけて悲しませれば、そのことをいつまでも根に持って相手を責めることも、そうしたらいいのではないかという誘惑もやって来ることはあります。でも、私たちはそれをしないのです。なぜか——。それは私たちこそが本来であればさばかれるべき存在であって、その私たちが神様の前に恵みによって救われたのだということを覚えているからです。もし私たちが赦すことに難しさを感じる如果能够あれば——いや、私たちはそのように赦すことに難しさを感じることは多々ありますけれども——その時こそ、私たちに十字架で示されたキリストの赦しというものを思い起こし続けることです。キリストは、私たちの罪をどんなふうにも赦してくれました？キリストの赦しには決められた回数がありました？あなたはもうこれだけの罪を犯したので、これからもう二度と赦されることはありません、そんな限度はありませんでした。主は私たちの過去も現在も未来もそのすべての罪を赦してくださいました。キリストの赦しというのは、私たちが何かを達成したから与えられたものでした？私たちが何か正しいことをしたから神様が与えてくれたものでした？そうではありませんでした。主は一方的な恵みによって、私たちの罪を赦してくださいました。私たちはだれひとりとして正しいことをすることすらできませんでした。でもそんな私たちに対して、神様が一方的な恵みを注いでくださったのです。キリストの赦しというのは、この部分は赦すけれども、この部分は赦しませんという、そんな部分的なものでした？そうではなかったのです。主は私たちが心から悔い改めて罪を告白するのであれば、その罪をすべて赦してくださいと、そう約束してくださいました。私たちの愛する主は、このようにして私たちのことを愛してくださいました。

そして、完璧な教会というのは存在しないし、罪を持っていない人も当然いません。私も罪を持っているし、皆さんひとりひとりも罪を持っている。だからこそ、すれ違いや争いというのは残念ながら起こってしまいます。それは必ずやって来るのです。問題はそれが起こった時にどのように応答するかということです。鍵はいつもイエス様の十字架にあります。この方の姿を覚えて、互いに愛を持って赦し合うことを実践していくことです。パウロはコリントの教会からさまざまな苦しみを受けて、大きく傷つけられました。しかし、そんなことを根に持って、彼らに仕返しをしようとはしませんでした。彼は自分がさばき主となることはしなかったのです。むしろ心から悔い改めた兄弟姉妹たちのことを知らせとして聞いた彼は一緒に喜んでいました。彼の心には準備されていた恵みの態度がありました。私たちが主権者であり、さばき主である主を覚えることができます。そして私たちの罪を贖ってくださった主の血、血潮を、私たちの罪を贖い出してくださいましたそのキリストの十字架を見上げることができます。恵みの態度を準備することです。私たちの主はどのように私たちが愛してくださいましたのかを、どのように赦してくださいましたのかを覚え続けることです。難しいチャレンジなことかもしれませんが、でも、

私たちはそのことができるように変えられ、聖霊なる神様が与えられ、みことばが与えられました。だからこそ神様に喜ばれる者として、みことばに従う者として、ぜひともに成長していきましょう。